



日本キリスト教団
三軒茶屋教会
<http://sanchurch.jp/>

三軒茶屋 教会通り

〒154-0024
 第43号 2011年12月発行 東京都世田谷区三軒茶屋1-31-5
 TEL/FAX: 03-3418-4933
 発行：三軒茶屋教会 広報部

東日本大震災後、「絆」という文字を掲げている場面が増えました。そこに込められた思いは、被災者との連帯、復興努力への共感、困難を克服しようとする奮闘している人々への励ましでありましょう。

ところが、「絆」という文字の語源はそのような思いとは異なります。いけにえにするため半分に切り裂いた牛を縛り合わせる綱、が語源のようです。転じて、大切な家畜が逃げないようにするための綱、大切な家族や仲間たちとの強い結び付きを離れ難いものとする義理や人情といった意味へ変化したようです。

また古来、家畜をつないだり、人を拘束して自由を奪うために綱をかけることを「絆（ほだ）す」とも表現してきました。いずれにせよ、「絆」という語は、切れないようにする、保持させると、いう意味があります。

聖書の中の「絆」も、何かをしぼりあわせるロープ、共に縛り合う帯という意味の言葉が用いられています。契約のきずな（エゼキエル20・37）、愛のきずな（ホセア11・4）、悪の縄目（使徒8・23）、平和のきずな（エフエソ4・3）、すべてを完成させるきずな（コロサイ3・14）、

「絆」を掲げる覚悟

牧師 伊藤英志

一縷に捕らわれている（ヘブライ13・3）などです。

漢字や日本語の語源、さらに聖書での用いられ方を総合すると、「絆」には連帯や共感、励ましといった内面的な情緒から出てくる思いや行いとは、かなり異なる意味を伴うようです。

本来の「絆」とは、当事者や対象者と心身共に一体となるさまではないでしょうか。その先に生じる事態がいかなるものであっても決して離れることなく、生死までも共にす

る。そのような覚悟で結び付いているのが「絆」によって現れ出てくる実体となるはずだ。

たとえ離れていても一つの心であり続けるとか、決して忘れない、といった心情的なものだけを「絆」は目指しているのではないはずです。

確かに今、家族や友人など愛すべき人々の間で「絆」を再発見したり、もう一度確かめ合おうとする動きがあります。それはとても大切なことです。これまで疎遠だった者たちが互いに連絡を取り合ったりすること

は、心を豊かにし、今まで忘れていた思いを呼び起こしてくれそうです。

しかし、本来の「絆」——生死までも必ず共にする——その覚悟を伴っているとはまて言いきれません。一般論としてそこまで求めるのも酷すぎるでしょう。

そうした社会に向かって、教会は生死を共にする「きずな」が生じよう事実を敢えて全面に打ち出しています。キリストの十字架が、まさに生死を共にする「きずな」、そのしるしとして与えられているからです。



神の子を亡き者にせんとする人間によって、主キリストが確かに十字架につけられ死なれた。そしてその死

から復活された。この出来事こそ、私たちが死ぬる者から生ける者となるために主なる神が打ち立ててくださった確かで唯一の「絆」なのです。神の子の死と固く縛り合わされた道を歩み、定めの日に至るまで生きる。その先にあるのは、生ける神との交わりが決して切れることなく、生ける命へと向かう綱が保持され続ける確かな未来です。

今こそ教会にある「きずな」を強めたい。そして、真の「きずな」を掲げる覚悟を新たにしたいのです。